

犯罪ノンフィクションの醍醐味



何からの重大な犯罪事件が報道される。その報道を通して犯罪を行った加害者と、犯罪の被害を受けた被害者の存在が我々に明かされる。いつ、どこで、誰が、どんな事件を起こしたか？ わたしたちのリアクションは、それが身近な人間によるものでない限り「ひどい事件を起こしたヤツがいるなあ。被害にあった人は可哀想だな」というようなものであると思う。報道を通して事件を知るわたしたちの視点は、犯罪を犯した容疑者とその被害を受けた被害者のみに集中する。

犯罪ノンフィクションを読む面白さは、その視点が拡大される点であると思う。登場人物が加害者と被害者を超えて、一気に増えるからである。加害者にも親兄弟がいるし、被害者も同様である。ドラマに例えると、主役以外の脇役の人々がきちんと描かれるのだ。そんな脇役たちの心中に思いを馳せるといことが、犯罪ノンフィクションを読む時の醍醐味であるように思う。それらは、そういうわたしたちに知らされない事実を教えてくれるのだ。

わたしが犯罪ノンフィクションに魅力を感じるのは、このように事件の周辺が「加害者と被害者」という個人同士の対立構造を超えて視野に入ってくるからに他ならない。そのような視野の広さは、新聞やネットの報道だけでは決して手に入れることはできない。他人の不幸を暴き、それによって生計を立てる側面がある「ノンフィクションライター」ではあるが、こういう人たちが真実に迫ろうとしてくれるおかげで、わたしのような一般人は視野を広げることができる。

高橋いさを

〈劇作・演出家〉